

横顔
就任インタビュー手外科の専門病院へ
強みを軸に体制転換

大阪掖済会病院が2026年4月、診療科を絞り込み、元々強みとしてきた『手外科・外傷マイクロサージャリーセンター』を軸にした診療体制に転換した。新病院長に就任した五谷寛之氏に話を聞いた。

公益社団法人日本海員掖済会
大阪掖済会病院

ご た に ひ ろ ゆ き

五 谷 寛 之 病院長

1988年大阪市立大学(現・大阪公立大学)医学部卒業。仏国立ナンシー医科大学、仏手外科研究所、大阪市立大学大学院整形外科講師、大阪掖済会病院手外科・外傷マイクロサージャリーセンター長などを経て、2026年から現職。

公益社団法人日本海員掖済会 大阪掖済会病院
大阪市西区本町2-1-10 ☎06-6581-2881(代表)
<https://osaka-ekisaikai.jp/>病院再編のなか
進むべき道選択

明治期に海員支援のため設立され、戦後は一般の地域医療を提供してきた公益社団法人日本海員掖済会、全国展開する8病院の一つが大阪掖済会病院だ。113年の歴史を刻み、大阪市西部医療圏の2次救急病院

として活動してきた。今回の診療体制の転換に伴い、内科は循環器や代謝内分泌を中心に外来のみ継続することになった。一方、五谷氏がセンター長を務めてきた手外科・外傷マイクロサージャリーセンターが同院の主軸となる。

再編があった。「当地には総合病院的な機能をもつ病院がたくさんあるため、各病院のあり方が見直されてきました」と五谷氏。同院の立地する大阪市西区一帯は中小の製造業が盛んで、労災による外傷患者も多い土地柄だという。その中で求められる医療を磨いてきた同院は、自らの強みに専

門特化する道を選んだ。

特殊な診療分野
広域受け入れへ

マイクロサージャリーは微細な血管や神経、リンパ管などを手術用顕微鏡を用いてつなぎ合わせる手技を指すが、切断指の再接着を代表として他の四肢や足趾からの組織移植など応用分野は広い。この分野で五谷氏は米ベストドクターズ社の「ベストドクターズ・イン・ジャパン」に2014年から10年連続選出されている。その五谷氏の率いる同センターでは、切断指の再接着や手根管症候群、腱鞘炎などの治療のほか、交通事故などで骨折した足の骨が皮膚を突き破る「開放骨折」の救急診療などにも取り組んでいる。手術件数は年間1500件にのぼることもあるという。

重症例に強い病院を目指すからといって、多くの住民のニーズである一般診療もおろそかにしない。近年「メノポンド」と命名された、更年期女性に多くみられる手の慢性疾患をはじめ、高齢者に多い骨折、骨粗鬆症、ロコモシンドロームなどにも対応していく構えだ。

病院トップとして今回の体制転換をどう導いていくか。対外的には、特殊な診療分野の専門病院としてアピールし、「患者さんに関

西・近畿全域から受け入れられるようにしたい」。

一方、今回の診療体制転換に伴い、担当が変更になった職員へのフォローが求められている。そこで五谷氏は、専門外の内科の回診に加わり始めた。「変わる姿」を現場で自ら率先して見せることで、職員の奮起を促す考えだ。

外国人材も育成
技術を世界へ発信

五谷氏は手外科診療のスペシャリストであるとともに手術装置の研究・開発者の顔も併せ持つ。科学技術振興機構のプロジェクトとして、微細な血管縫合を支援するロボットシステムを民間企業と共同開発するなど実績を重ねてきた。

24、25年に日本マイクロサージャリー学会理事長、日本手外科学会理事を務め、26年にアジア太平洋再建マイクロサージャリー学会事務総長に就任。こうした学会活動の一環で後進の指導にも力を入れている。

人材育成の対象は国内にとどまらない。同院でこれまでタイやベトナム、韓国、アフガニスタンなどから30人以上の医師を研修医として受け入れてきた。彼らが育ち、故国で活躍する日が待たれる。「再建マイクロサージャリー」の技術が当地から世界に発信されていけば、うれしいですね」

関西

病院からさがす

100~199床

病院長就任